

日本教育心理学会第55階総会（2013）

準備委員会企画シンポジウム1

「発達・教育支援におけるエビデンスにもとづいた支援」

# 通常学級での発達・教育支援 「通常学級における有効な 支援形態とは？」

米山 直樹

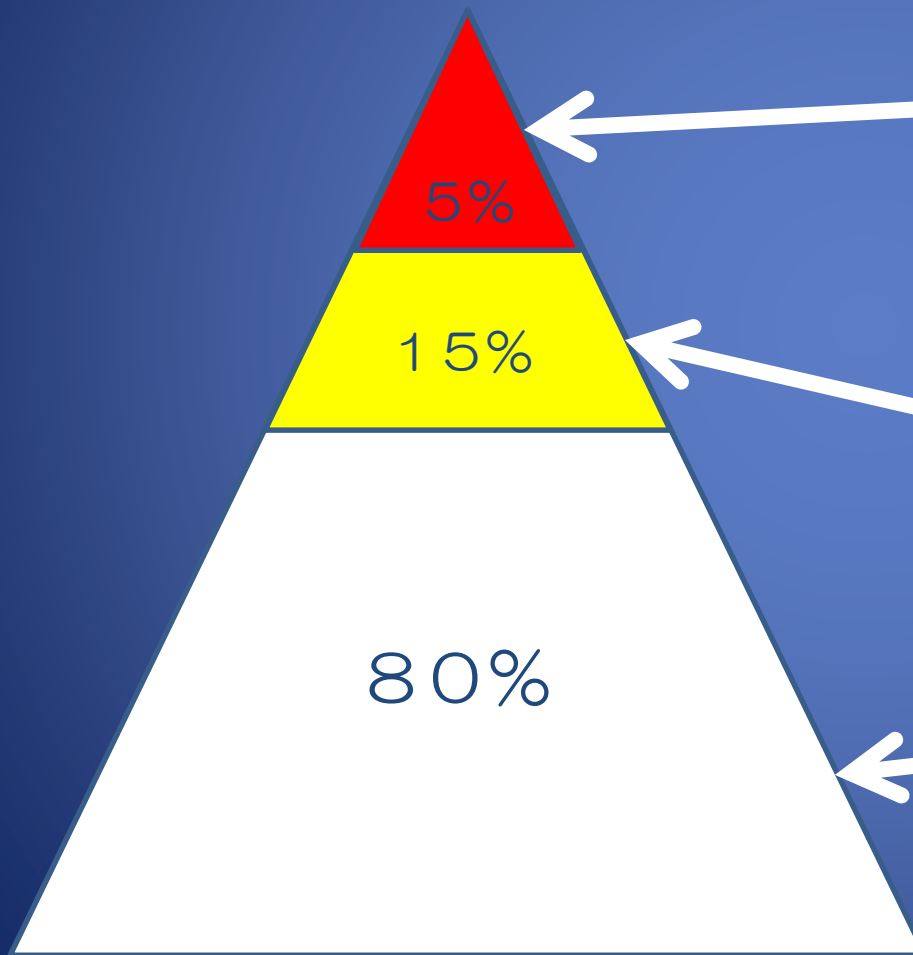
関西学院大学文学部

# 通常学級における支援の必要性

- 文部科学省による「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」
- 2002年：6.3% → 2012年：6.5%
- 特別支援学校、特別支援学級、小・中学校における情緒障害及び知的障害特別支援学級、通級による指導対象児童生徒が著しく増加

# 階層的な予防的アプローチ

(Sugai & Horner, 2002)



リスクの高い行動を呈する児童・生徒個人に特化された個別システムへの第三次的介入

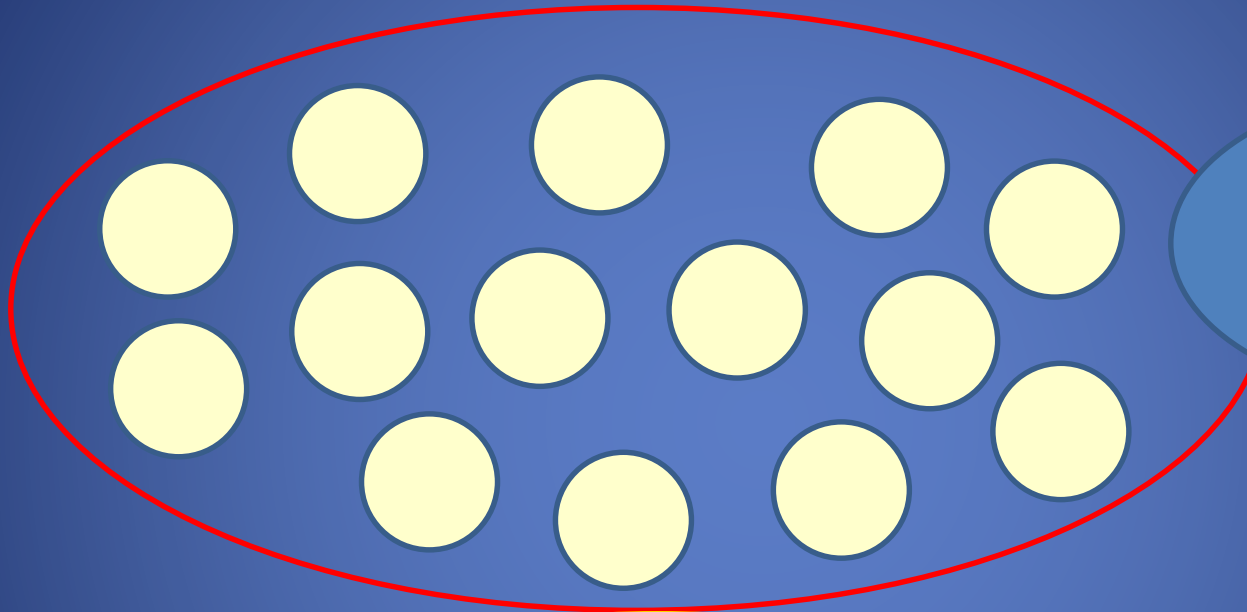
リスクのある行動を呈する児童・生徒に特化されたグループ・システムへの第二次的介入

全児童・生徒、全スタッフ、全場面に対する学級・学校単位のシステムへの第一次予防的介入

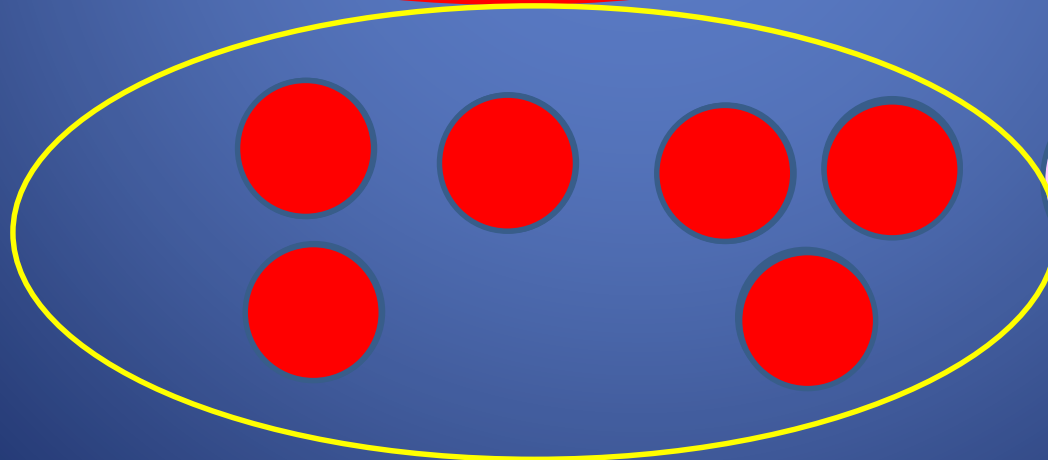
# インクルージョンの視点で考える

クラスに在籍する子どもたち

学カレベル



一般的授業レベル  
に対応可能な  
子どもたち

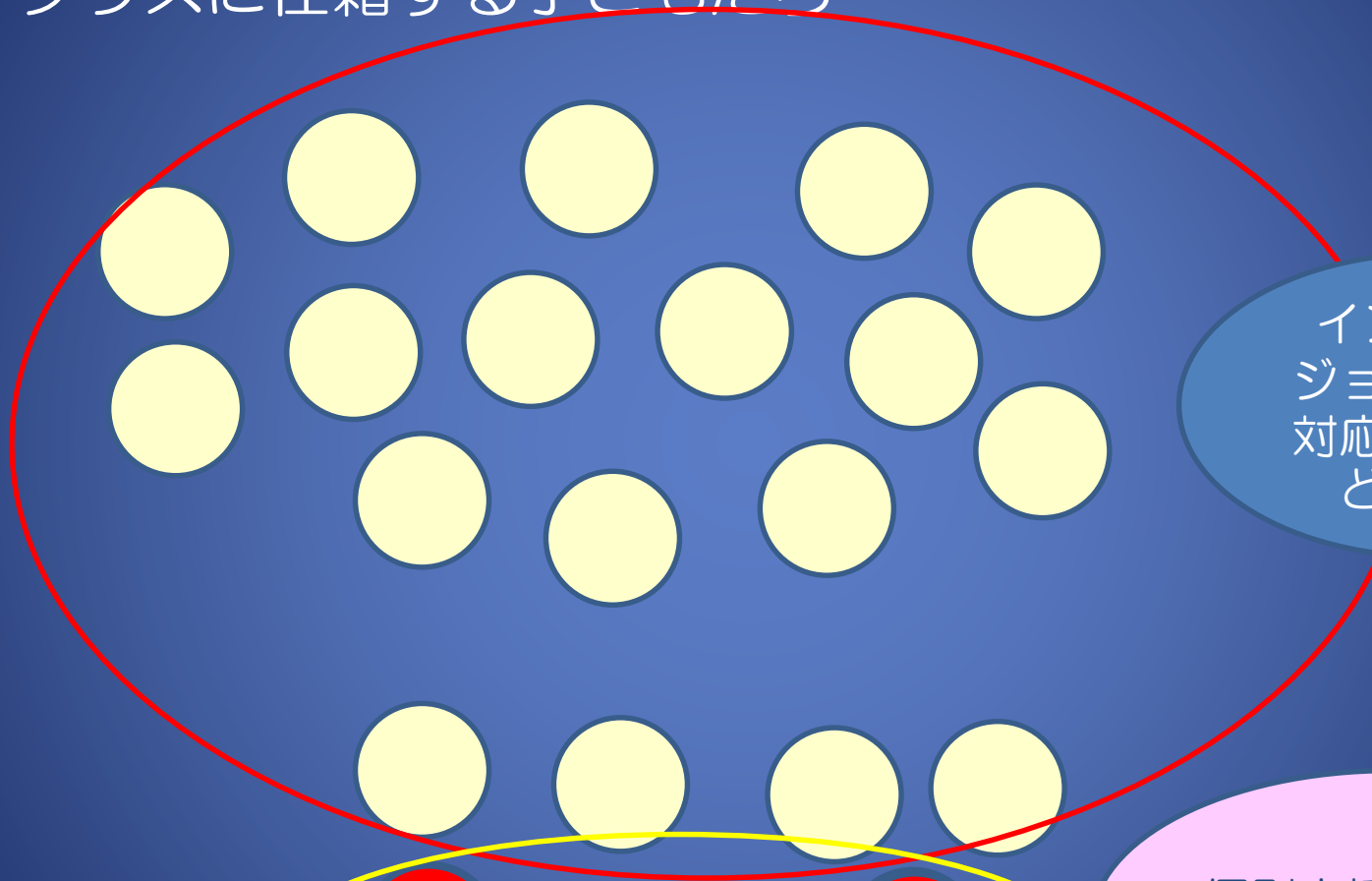


一般的授業レベル  
に対応困難な  
子どもたち

# インクルージョンの視点で考える

クラスに在籍する子どもたち

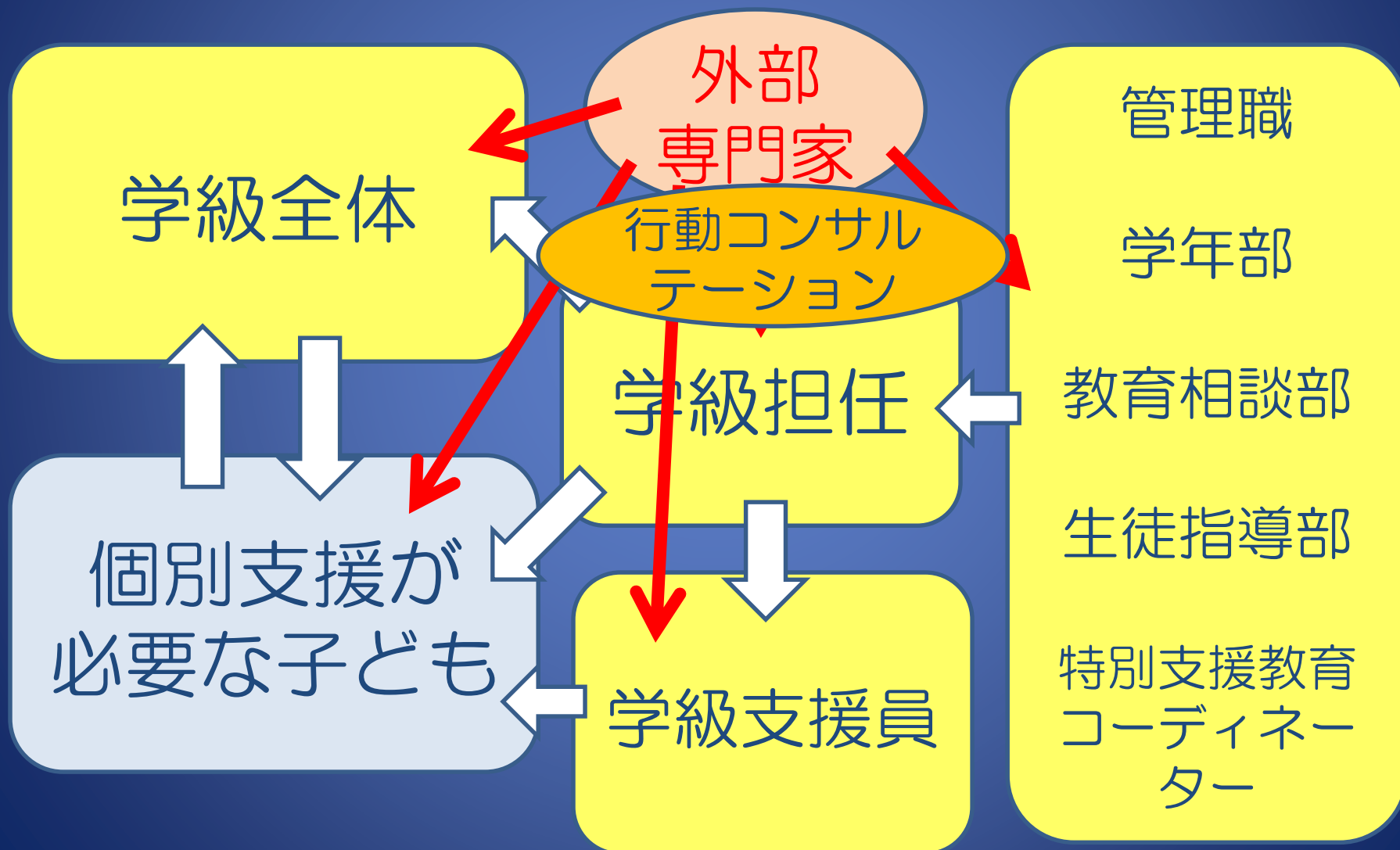
学カレベル



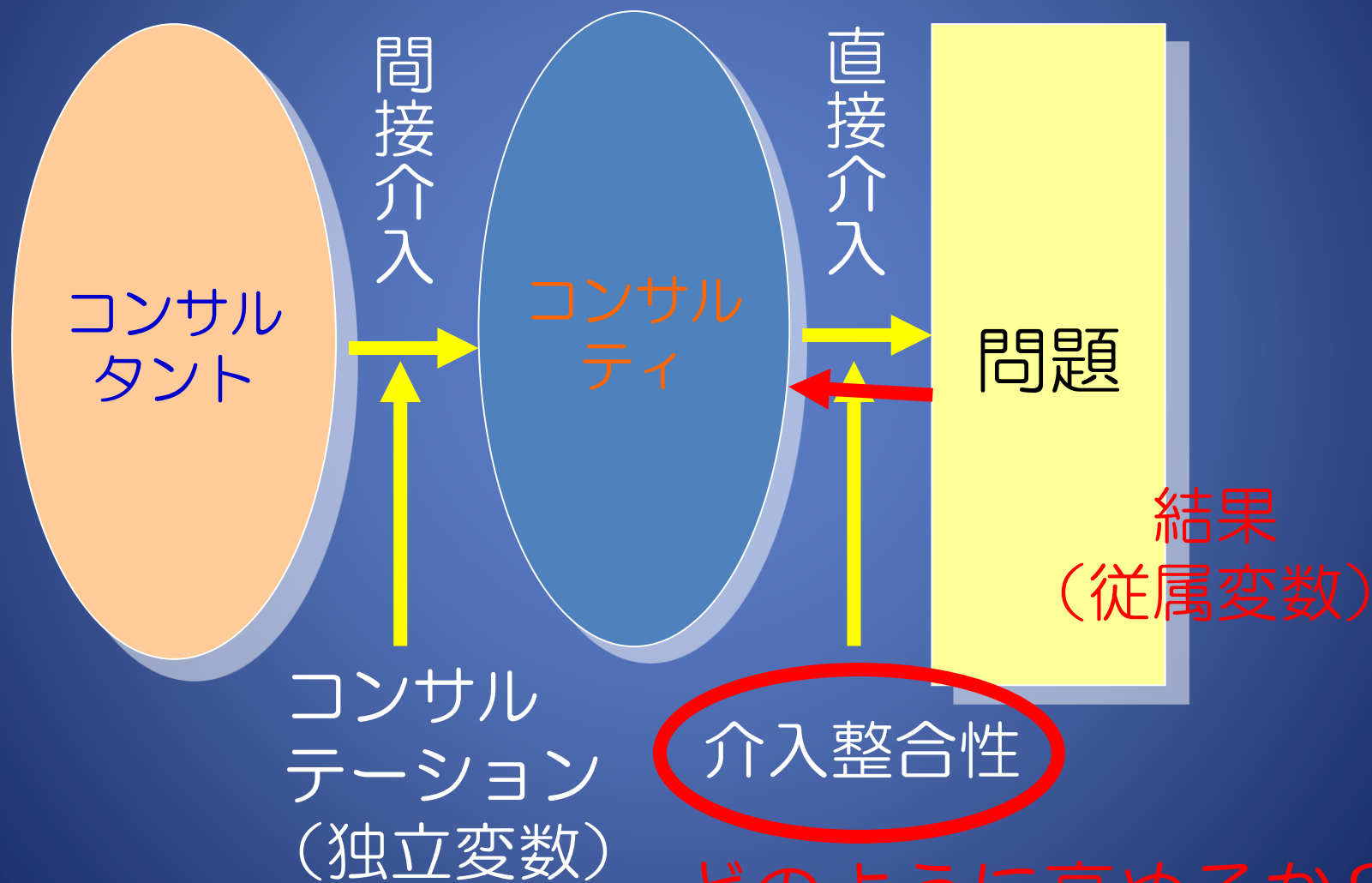
インクルージョン教育で  
対応可能な子  
どもたち

個別支援の対象と  
なる子どもたち

# 通常学級における支援のレベル



# 行動コンサルテーションの流れ



どのように高めるか？

# 事例：通常学級に在籍する2名のADHD児への介入

(金平・米山、2004)

- 対象：全校児童約300名の中規模公立小学校の6学年2学級にそれぞれ在籍するADHD児童2名（A児、B児）
- A児：介入時においては、授業中でも学習に取り組もうとはせず、漫画を読んだり描いたりして過ごしていた。またその活動に飽きると教室を立ち歩き、学習しているクラスメートの様子をのぞき込んだり、妨害したりしてしまい、そのことが原因でクラスメートから非難されたり、担任から叱責を受け、癇癢を起し、教室から飛び出していってしまうことがあった。
- B児：介入時においては、学習活動には一切取り組もうとはせず、紙や木材、石、土、水、ペン等のものを教室の自分の机の周辺に持ち込み、授業中はずっとそれらを使って手いたずらをして過ごしていた。時折、そのことでクラスメートや担任から注意されることがあったが、その反応として暴言を言ったり、癇癢を起して教室を飛び出すといったことがあった。また、A児が本人をたびたびからかいに来ることがあり、そのことが原因で興奮したり癇癢を生じることがあった。



# アセスメント手続き

- 大学院生による対象児2名の行動観察（1週間）
- 担任とのミーティング（1週間）
- 問題行動改善の必要度と授業困難教科アンケートの実施
- 機能的アセスメント（問題行動の動機づけ尺度（MAS）とインタビュー）の実施

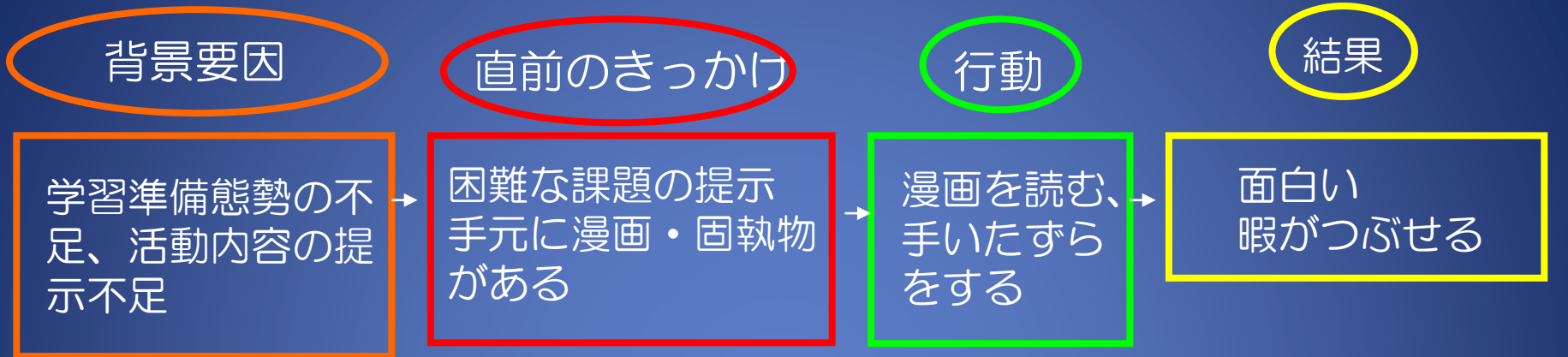
# 介入対象となる標的行動の同定

- A児
  - 「授業中、漫画を読む」
  - 「勝手に教室から出て行く」
  - 「癇癢を起こす」
- B児
  - 「授業中、手いたずらをする」
  - 「勝手に教室から出て行く」
  - 「癇癢を起こす」

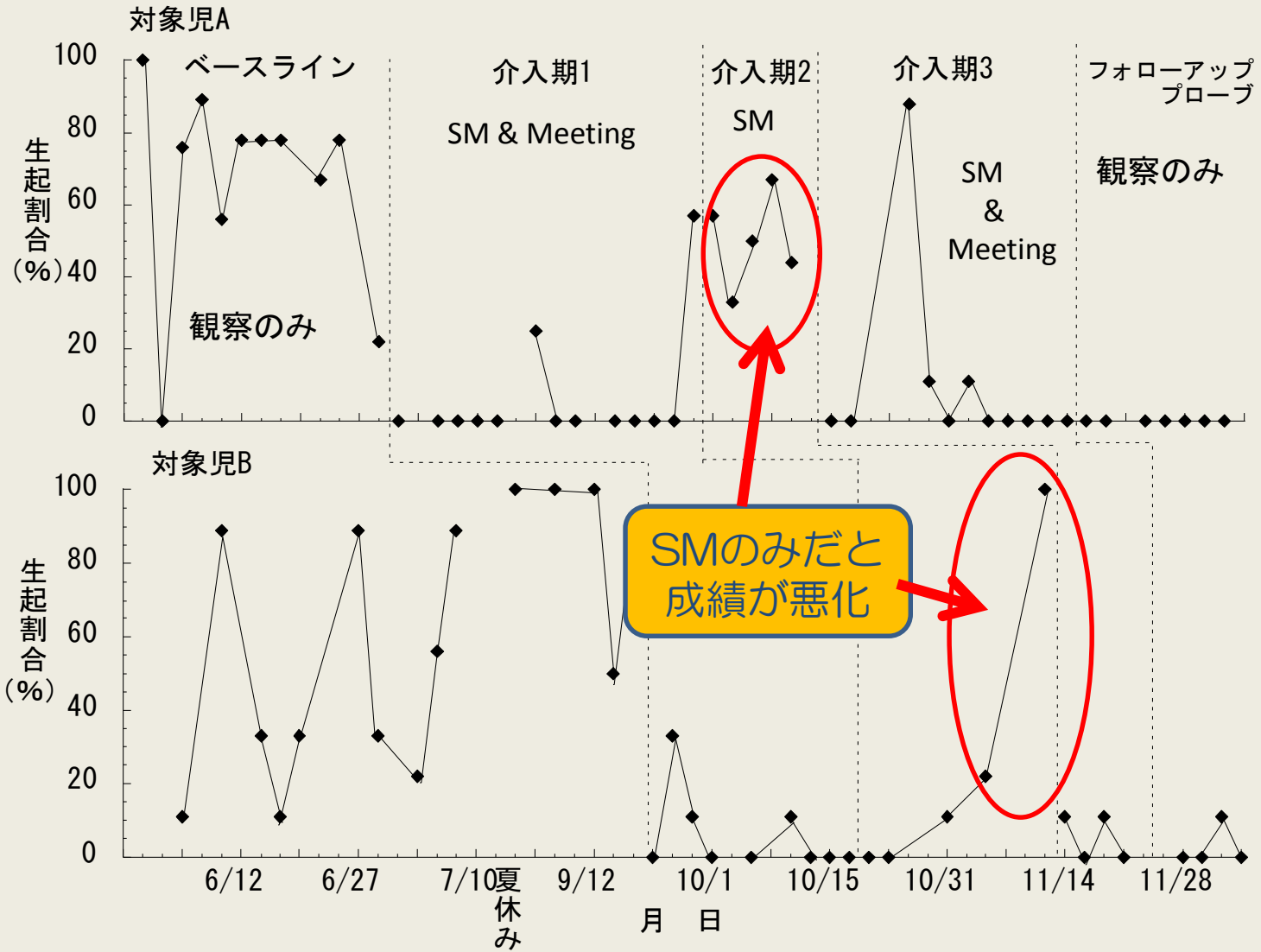
# 介入の実施

- 担任とのミーティング
- (介入方略の確認、練習、介入妥当性の検討、教師の受容度の確認)
- ベースライン期：行動観察のみ
- 介入期1：教師のセルフモニタリングとミーティング
- 介入期2：教師のセルフモニタリングのみ
- 介入期3：教師のセルフモニタリングとミーティング
- フォローアップ期：行動観察のみ

# A児の「漫画を読む」行動とB児の「手いたずら」行動に対する機能分析と介入方略

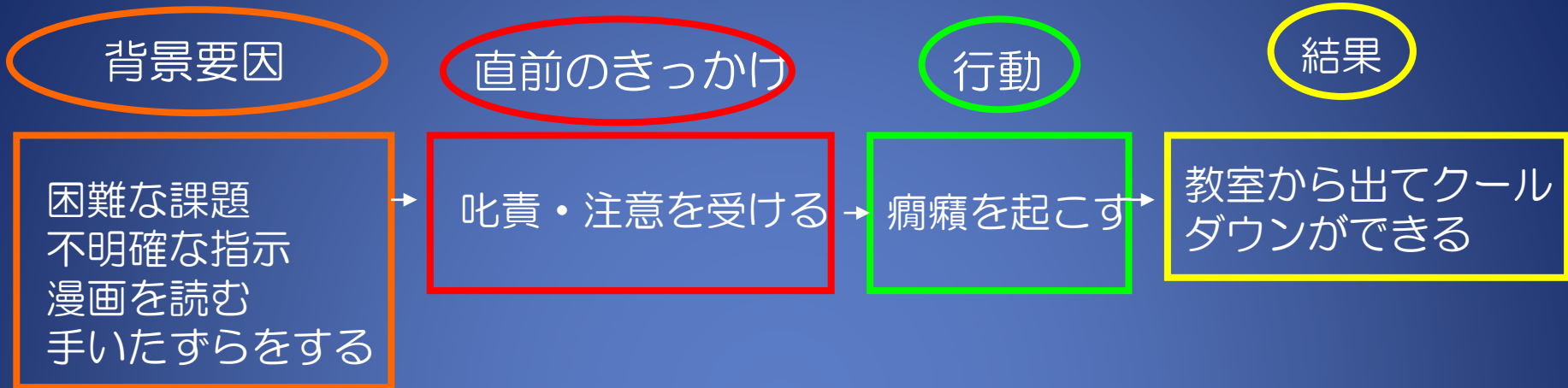


背景要因に対する支援	直前のきっかけに対する支援	行動に対する支援	結果に対する支援
<ul style="list-style-type: none"><li>学習用具の整理と必要な物品の明示</li><li>黒板の近くに席を移動</li><li>課題内容を視覚的にプログラム化して提示</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>簡単な課題に変える、量を減らす</li><li>電卓等の補助器具を与える</li><li>課題に対して個別にやり方を説明する</li><li>漫画や固執物を担任が管理</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>課題ができている場合、できていることを伝え、ほめる</li><li>つまずいていたら、ヒントを与えたり、はげましたりする</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>決められた課題ができたなら、トークン（シールまたはスタンプ）を与える</li><li>課題が終了したら、ほめて休息を与え、漫画・固執物を渡す</li></ul>

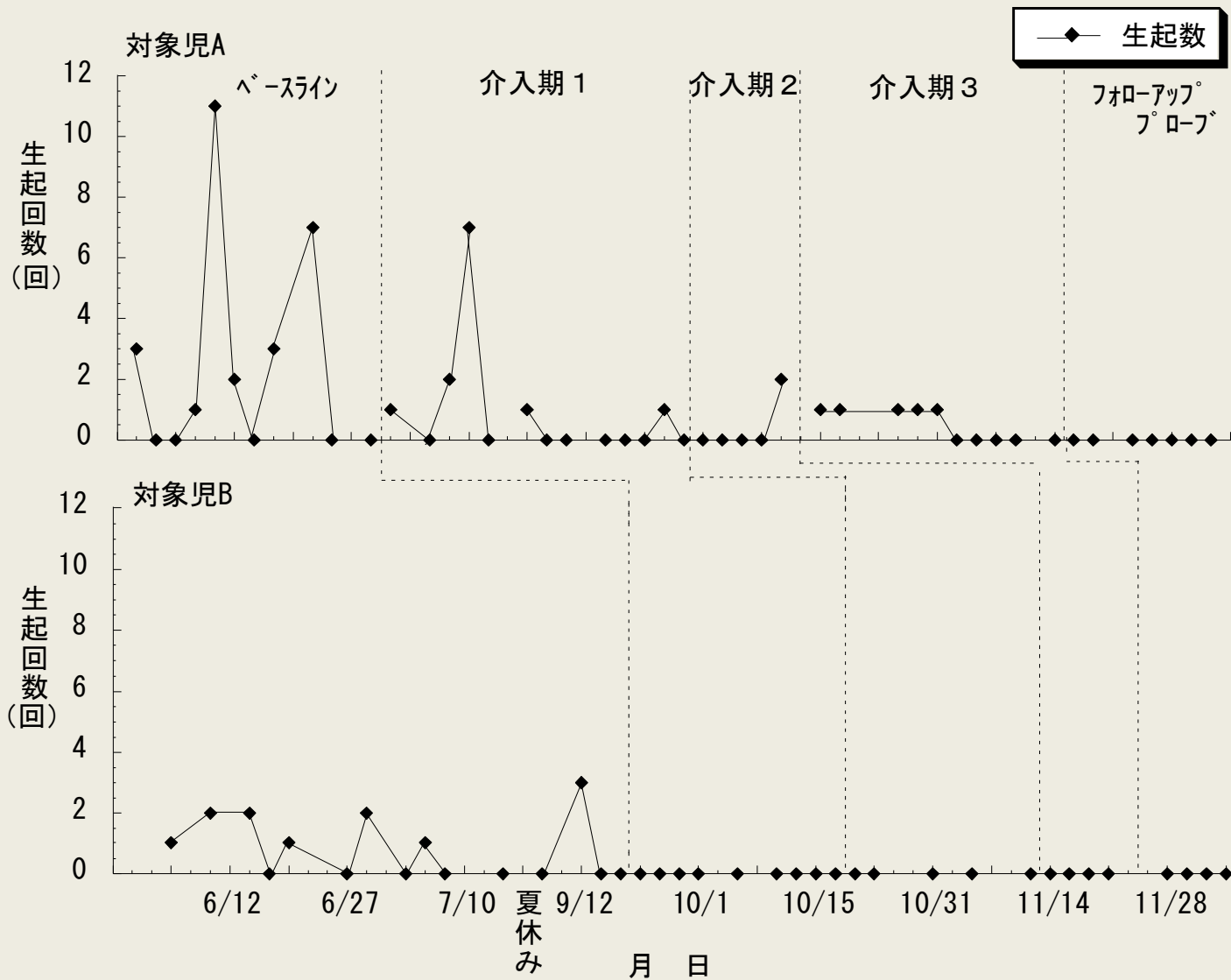


対象児Aの「漫画を読む」行動および対象児Bの「手いたずらをする」行動の授業内における生起割合の変化

# A児とB児の「癩癩」行動に対する 機能分析と介入方略



背景要因に対する支援	直前のきっかけに対する支援	行動に対する支援	結果に対する支援
<ul style="list-style-type: none"><li>課題内容の視覚化</li><li>取り組み可能な課題を与える</li><li>漫画・固執物を担任が管理する</li><li>漫画・固執物の要求の仕方を教える</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>冷静な口調で指示する</li><li>叱責ではなく、今何をすべきかを具体的に指示する</li><li>他の児童には自分の課題に集中するよう伝える</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>気分の状態を聞き学習が続けられるか休息が必要か尋ねる</li><li>どのように休息を求めたら良いのかを教える</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>休息を求めることができたなら図書館へ行くことを許可する</li><li>戻る時間を確認し必要に応じて促す</li><li>教室にもどってきたらほめる</li></ul>



対象児AとBの「癇癩を起こす」行動の授業時間内における生起回数の変化

# A児の「勝手に教室から出て行く」行動に対する機能分析と介入方略

背景要因

癇癢を起こして叱責・注意を受ける友だちとのトラブル

直前のきっかけ

教室に居づらくなる

行動

教室から出て行く

結果

一人になれる

背景要因に対する支援

- ・ 冷静な口調で指示を出して興奮させないようにする

直前のきっかけに対する支援

- ・ 他の児童の注目を浴びないところに本人を移動する
- ・ 他の児童には自分の課題に集中するよう伝える

行動に対する支援

- ・ どのように休息を求めたら良いのかを教える
- ・ 気分の状態を聞き一人になりたいかどうか尋ねる

結果に対する支援

- ・ 休息を求めることができたなら図書室へ行くことを許可する
- ・ 時間を見計らって様子を見に行く
- ・ 教室にもどってきたらほめる



# B児の「勝手に教室を出て行く」行動に対する機能分析と介入方略



## 背景要因に対する支援

- 表情、態度から本人の気分の様子を観察する
- 話しかけたり、ユーモアを使って気分を和ませる

## 直前のきっかけに対する支援

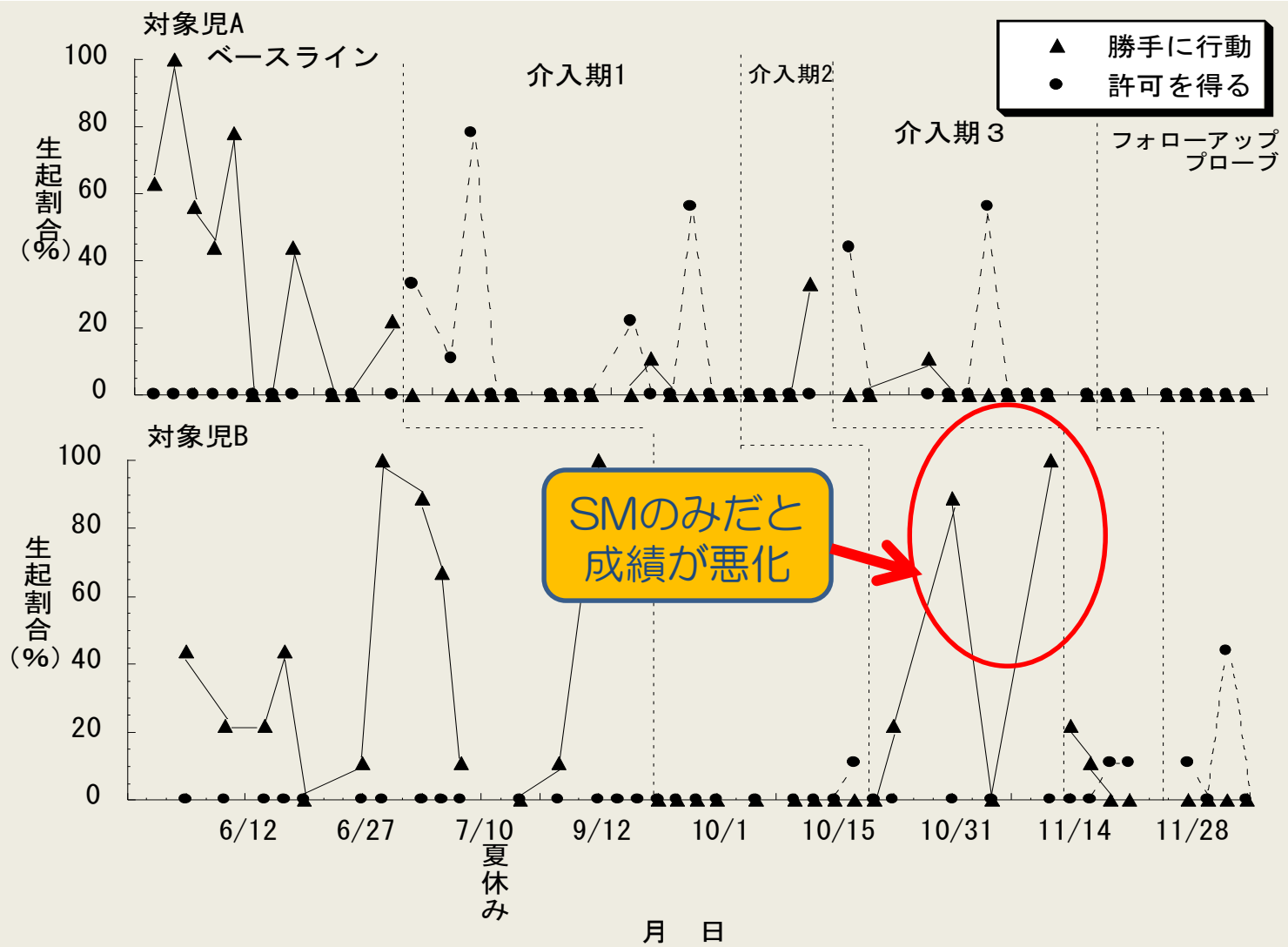
- できる課題を提供し、暇を与えない
- 我慢できないようなら、先生に声をかけるように伝えておく

## 行動に対する支援

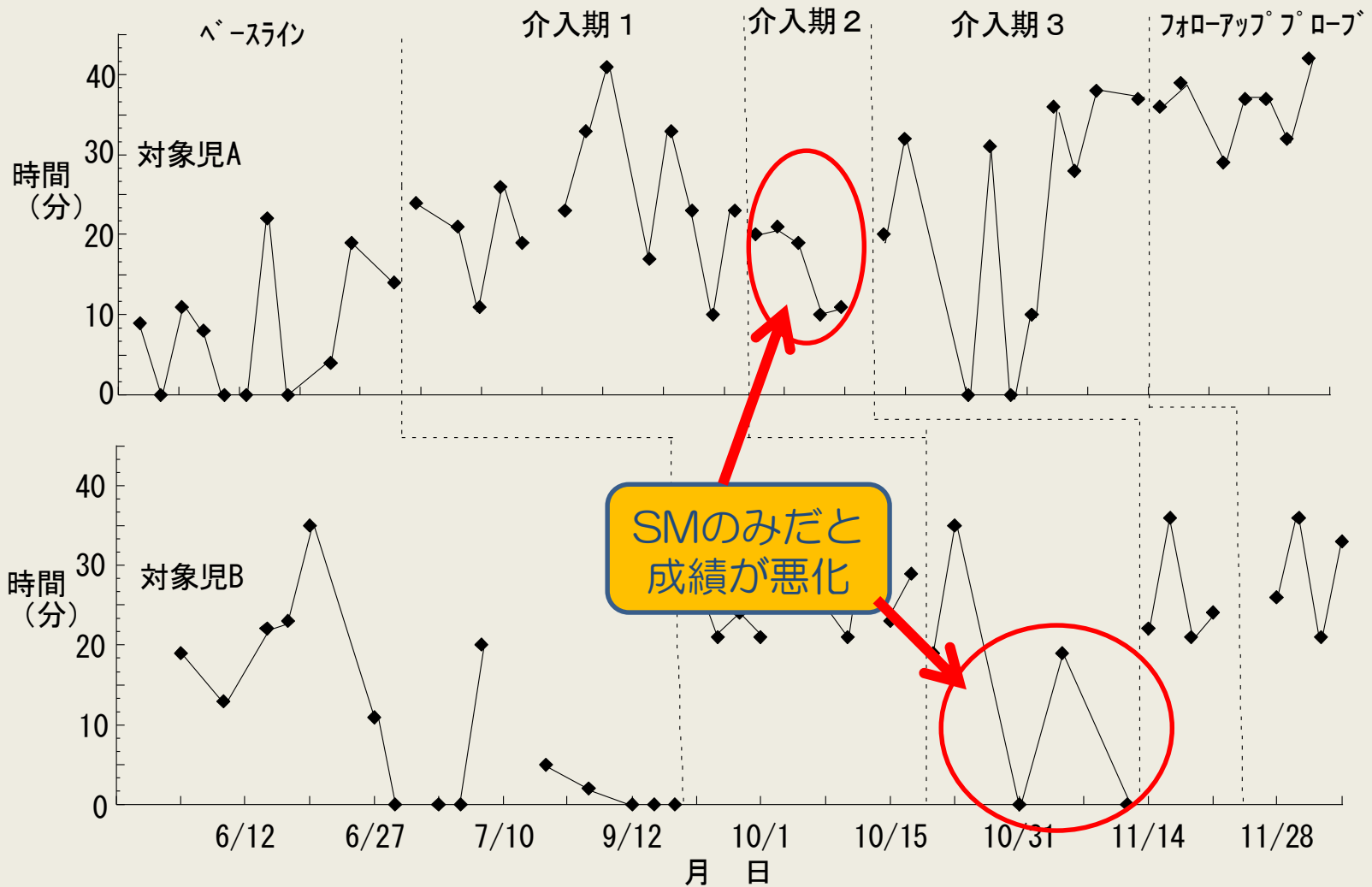
- どのように休息を求めたら良いのかを教える
- 気分の状態を聞き休息が必要か尋ねる
- 退室する際には場所と帰る時間を聞く

## 結果に対する支援

- 休息を求められたら退室を許可する
- 戻る時間を確認し必要に応じて促す
- 教室にもどってきたらほめる



対象児AとBの「勝手に教室から出て行く」行動の授業時間内における生起割合の変化

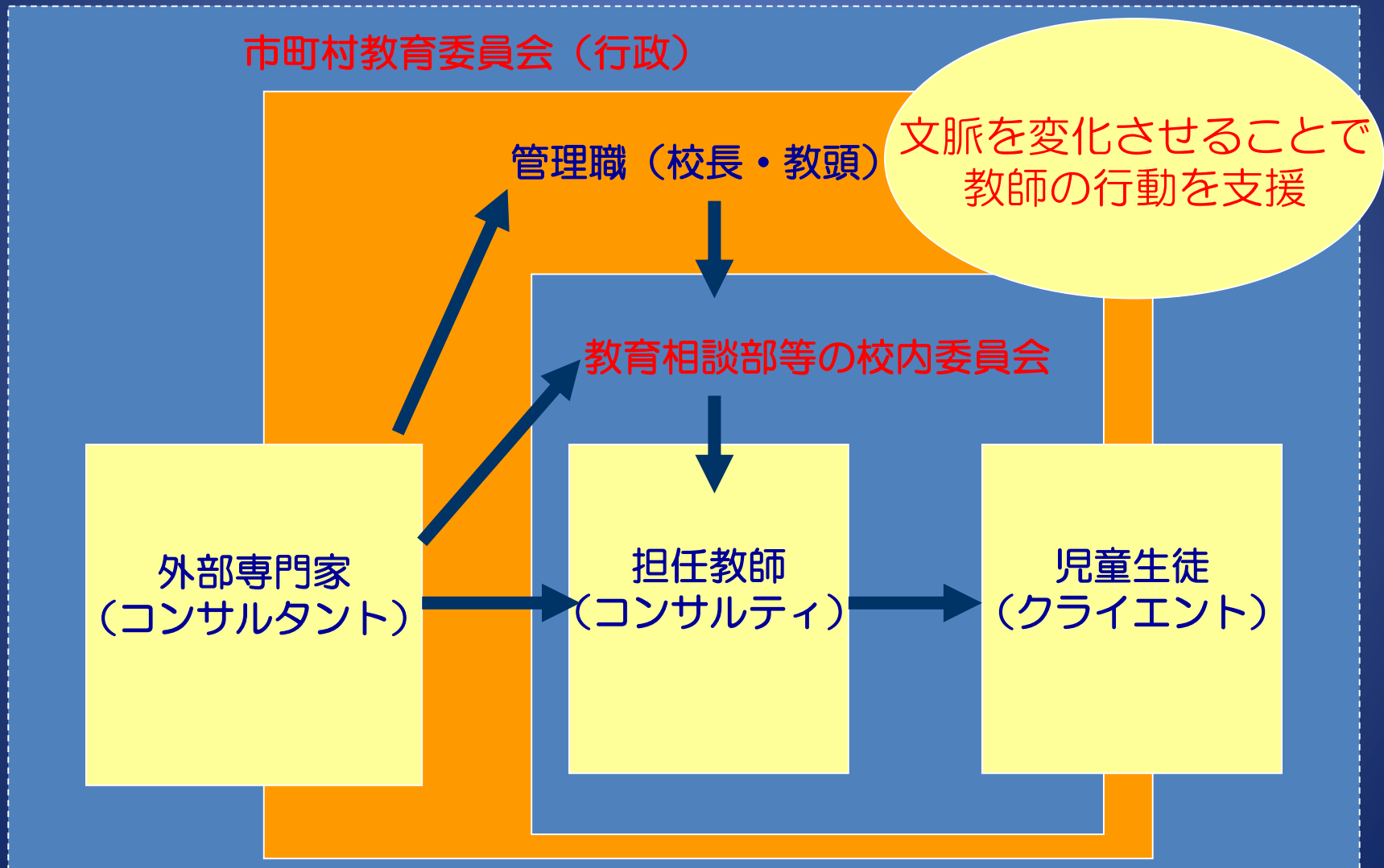


対象児Aおよび対象児Bの学習時間の変化

# 事例の考察

- コンサルティによる介入行動は、コンサルタントからの指示（先行刺激）だけでは維持されず、自身の介入によるクライアントの行動変化（後続刺激）により、大幅に改善。
- データを基にして介入の効果をフィードバックすることが有効。
- コンサルタントがいなくなった後の介入行動の維持には別途、随伴性の整備が必要。

# 学校の教育相談体制における 多層随伴性



# シングルケースデザインの意義

- 介入内容と対象者の行動変化の関係が明確化する。
- 介入者による介入行動が直接的に強化されやすい。
- 一般的に効果があると言われる方法も目の前の対象者に有効か否かは不明。
- 学校単位・学級単位の介入はRCTの知見により選択されるが、個別事例についてはシングルケースデザインによる介入を継続することで有効な支援方法が取捨選択される